

旧石器遺物集中部と縄紋堅穴覆土出土遺物の違いを述べよ

-日本旧石器研究の論点-

五十嵐 彰

前半（月見野仮説批判）

問題：旧石器遺物集中部と縄紋堅穴覆土出土遺物の違いを述べよ。

答え：旧石器遺物集中部は、使用痕跡遺構で自然層中の点の集合体である。縄紋堅穴は、居住空間の確保を目的とした製作痕跡遺構で堅穴覆土出土遺物は住居跡と重複している。→ ①

堅穴覆土出土遺物は、空間確保を目的とした遺構を転用した廃棄遺構の遺物群であり、住居跡とは直接には関わらない。→ ②

旧石器遺物集中部は、一次廃棄（遺棄）か二次廃棄（廃棄）か確定していないが、環状に分布する場合は一次廃棄とされ、その想定復元図には多くの問題が表出している。→ ③

① 遺構の種類

製作痕跡遺構は製作痕跡によって区切られる明確な輪郭が存在するが、使用痕跡遺構は使用頻度が顕著になることによって認識される（五十嵐 2006）。遺物集中部、焼土跡、踏み分け道など使用の中心部ではその痕跡は明確であるが、周縁では曖昧となり、誰もが納得する範囲を設定することが困難である。ある<場>を使用したことによって、使用痕跡が生じて認識することができる。だから<場>からすれば使用痕跡であっても、廃棄された個別の<もの>からすれば廃棄痕跡となる。「石器製作場」とは、作られた<もの>である石器に基づく名称であり、遺構区分は本来<場>に基づく定義が第一とされるべきである。

旧石器遺物集中部は自然層中における単位性が明確でない点の集合体であるのに対して、縄紋堅穴覆土出土遺物は製作遺構という人為的な面で区切られる点の集合体である。だから旧石器遺物集中を「覆土出土遺物」とする人はいない。なぜならば「覆土」とは、面で区切られる閉鎖空間である製作痕跡遺構の内部を充填する土壌を指すからである。そして面で囲まれる縄紋堅穴が「切り合い」という時間的な前後関係を示すのに対して、旧石器遺物集中部は重複すれば単位性の区分が困難となる。これは、「一般的文化層」と「旧石器的文化層」の違いである（五十嵐 2000b、2025）。

② 遺構の転用

縄紋堅穴覆土出土遺物は、堅穴の機能である居住とは関連しない。住居機能に関連する遺物は、床面に掘り込まれた埋甕などの埋設土器あるいは床面に接して出土する遺物群である。床面から浮いて出土する覆土出土遺物は、遺構周辺の遺物が流入したか窪地を廃棄の場として再利用した「遺構再利用遺物」である。縄紋堅穴覆土出土遺物が関連するのは、廃絶した居住遺構を再利用した廃棄遺構であり、「縄紋堅穴転用廃棄遺構出土遺物」と言い換えられるべきである。転用される以前の遺構に伴う遺物と転用された後の遺物は、明確に区別されなくてはならない。

③ 廃棄の様相

一次廃棄（遺棄）は、製作（M）と廃棄（D）の〈場〉が一致する（MD）。二次廃棄（狭義の廃棄）は、製作（M）の〈場〉から運ばれて（T）、異なる〈場〉に捨てられる（D：MTD）。旧石器遺物集中部については、一次廃棄か二次廃棄なのか決着がついていない。あるいは両者が複雑に重複している可能性が高い。しかし環状遺物集中部については、一次廃棄であることに多くの研究者は同意している。

縄紋堅穴覆土出土遺物が、二次廃棄の産物であることに異論はないだろう。ある場合には堅穴埋没過程の窪地で石器製作などがなされたこともあっただろうが、窪地で土器製作が行われたと考える研究者はいない。石器と土器の資料論的な違いが、大きく作用している。

【遺棄・廃棄論の系譜】

- ・安藤・戸沢 1975 「われわれは砂川遺跡の第1次発掘調査以来、個々のブロックについて、それが先土器時代における最小単位の一生活面 —たとえば1住居の残映であるかもしれず、同一層準におけるその集合体は、したがって1集落を示す可能性が大きいという予測をもっている。ことに砂川遺跡の剥片剥離作業の実際を観察してみると、ブロックは石器製作作業が個別的に行なわれた場所を示すものであり、その集合体は石器製作作業が共同体のもとに管理、運営された結果を示すもののようと思われるのである。そこで、個々のブロックに残されている剥片剥離作業からそれらのブロックが形成された過程を復原することができるならば、それは先土器時代の遺跡の構造をさぐるための1つの目標となりうると考えている。」(161.)
- ・岡村 1979 「…ブロックの性格追究は、先土器時代の居住集団の実体を解明するうえで決定的な意味をもつ（春成 1976）と評価されながらも、その性格把握は具体的に進展していない。また「セトルメント・アーケオロジィ」や「個体別資料」の分析を主な武器とする研究者達も、ブロックは生活痕跡がその場に放置（遺棄）されたものであるという前提または潜在意識をもっている。逆に大部分の礫群は、①多くが破損礫によって構成され、しかも接合が複雑に広範囲で成立する、②礫塊の焼面、タール状物質の付着面が出土位置との関係で不規則である、などから比較的簡単に廃棄であると考えられている。さらに縄文時代のブロックの多くが、ゴミ捨て場に捨てられた廃棄物の集合であると解釈されるのと好対照をなす。（中略）旧石器時代のブロックも縄文時代と同様、その多くは廃棄によって形成されたものであろう。」(11.)
- ・安藤 1990 「ブロックの性格については、いま全く異なった、二つの見解を示すことができる。第一は、ブロックをいわば住居址にみたてる、ブロック住居址説である。第二は、ブロックを一種のゴミ捨て場とする、ブロック廃棄場説である。まず、第一のブロック住居址説は、スポットが、作業や行為のあった場に、そのまま元の状態で遺棄されていると考えるのである。そう考えるとき、スポットが集積するブロックは、そこが石器を製作した場であり、日常の石器の置き場となる。さらにそこは、礫群という火を利用した施設をそなえた、実際にヒトびとが起居した場ともなり、ブロックと重複する位置にイエがあったと推定されてくる。（中略）

これに対して、第二のブロック廃棄場説は、どのスポットも、元の場に遺棄されているのではなく、とりまとめて別の場に廃棄されたと考えるわけである。そうすると、スポットが集積するブロックは、石器製作に伴って生じた一連の原石の残滓、不用な石器や素材剥片、破損した礫群の礫片が、おそらく食料であった動物の骨などと一緒に、投げ捨てられた場となる。この場合、一般に先土器時代遺跡

のブロックが、ユニットFのように、円弧を描いて並ぶことから、そうしたブロック群に内接する空間に、イエが想定されてくる。しかも、そういったイエが想定される空間に、破損度の小さい礫群が発見される例の多いことも、この考えを裏づける一つの証拠ともなる。いいかえれば、イエをとりまく周縁部に、廃棄物が逐次スポットとして捨てられ、ブロックが形成されたと解釈するのである。居住期間中のゴミの増加が、順次新たな廃棄場を設けさせ、その過程で同一の個体別資料から、いくつかのブロックに分かれて分布するスポットが生まれたのだと。

では、ブロック住居址説とブロック廃棄場説とでは、どちらに説得力があるか。いまのところ、両説のいずれかで、遺跡の構造の全てを合理的に説明することはむずかしい。あるいは、双方の考え方が必要なのかもしれない。しかし、どちらの考えをとるにせよ、遺棄か廃棄かの違いこそあれ、スポットがヒトびとの石器の製作と使用にかかわる作業と行為の、その単位的な行動の痕跡である事実には変わりはない。また、スポットを残したヒトたちが、ブロックと直接重複したかどうかは別にして、ブロックを基点として空間を分け合うイエをもった点も疑いない。

ここでは、ブロック住居址説の立場から考察を進めることとする。そしていま、ユニットAとユニットFの、各々のブロックを中心とする場所に上屋があったと仮定しよう。すると、ブロックが隣接するユニットAには棟続きの、またブロック間に距離があるユニットFには別棟の、それぞれイエがあったと想定できる。こうして、砂川遺跡からは、六軒のイエが建ち並ぶ、先土器時代遺跡の一景観が復原されてくるのである。」(14-15.)

*70年代に「ブロック」を「住居の残映であるかもしれず」とした含みを持たせた遠回しな表現(安蒜・戸沢1975)は、「廃棄によって形成されたものであろう」との対立する見解(岡村1978、1979)を経て、「ブロック住居址説」と「ブロック廃棄場説」として説明されている(安蒜1990)。そこでは「ブロック廃棄場説」についても丁寧に説明されて「双方の考え方が必要なのかもしれない」とされいながら、論証を省略して「ブロック住居址説」が採用されている。

- ・西秋1994「…日本の旧石器時代人は、遊動的な屋外作業者であって、石器製作後は石屑を遺棄して立ち去ったというイメージがわくのは無理もない。にもかかわらず、一方では、旧石器時代の石器群は廃棄されたものが主であるという岡村らの意見が対峙しているのが現状である。廃棄は定着的屋内作業者に顕著な行動様式なのであるから、両説は重大な対照をなす。一体どちらが妥当なのだろうか。実は、現在の筆者にはどちらとも判断しかねる。既述した諸基準を総合的かつ厳密に用いた確実な事例分析が蓄積されていない現段階では、そのような一般化は早急にすぎるようにもみえる。」(93.)
「遺棄・廃棄研究が潜在的にもつこのような先史学的可能性を考慮すれば、日本旧石器時代遺跡の遺物集中部の解釈にも慎重であらねばならない。解釈のための方法論整備に多くの課題が残されている現状では、遺棄物が主体か廃棄物が卓越しているのか、そのどちらかが妥当という一般化を急ぐべきではなからう。」(94.)

*作業空間ひいては居住地の選地について居住移動や生業様式、集落の機能、生活様式の季節性など多くの要因が作用して連動する人間活動システムの一環としてなされていると説明され、だからこそ「(遺棄か廃棄か)どちらとも判断しかねる」「一般化を急ぐべきではない」とする慎重な結論が導かれている。

【石器集中部住居論の発展形としての環状ブロック群集落論】

- ・佐藤 2006 「2005 年 6 月に開催された日本旧石器学会のシンポジウム「環状集落 -その機能と展開をめぐって-」では、径数 m からなる石器集中分布域複数が径 20~100m 程度の環状に分布する環状ブロック群を、当該先史集団の「集落」形態のひとつとみなして議論したので、本稿ではこれ以降、この環状ブロック群を「環状集落」と呼ぶことにする。しかしながら、例えば各石器集中域が一つの居住単位であったかどうかといったような「集落」の構造に関しては、確定的な証拠に乏しく、意見の一致をみていない。」(47.)
- ・野口 2007 「石器集中部（ブロック、ユニットなど）を住居址、あるいはそれに類する居住の単位と理解することは、今日、日本の旧石器時代研究において半ば通説となっている。一方で、行動論、遺跡形成過程論、遺棄－廃棄論などの立場から、異なる見解が繰り返して提起されてきた。にもかかわらず、「石器集中部＝住居」という理解の枠組みは繰り返し引用され、普遍化されている。」(91.)
- ・小畑 2007 「現在わが国の旧石器時代遺跡の研究においては、「ブロック」（石器集中区）がその集団内のある単位を示す一つの手がかりとして利用されるのが常である。一般にブロックを一人の男性と数え、その背後に家族（イエ）の存在を想定し、遺跡構造や人口規模を推定する方法である。しかし、民族考古学的研究の視点からみると、そのような思考法はきわめて単純であることがわかる。ここ十数年の欧米の民族考古学の研究（Kroll E.ほか 1991）においては、①機能的に関連する遺物の集中はかならずしもその行為がおこなわれた場所に形成されない、②炉は家事や道具の準備、特別な目的行為などさまざまな行為の集中する場所である、③ごみ（石屑）の大きさや配置は廃棄・生産行為が実際に発生した地点を特定する手がかりとなる、④さまざまな自然作用は人間行為によって生じた廃棄物を再配列させる、などの遺構と行為の副産物であるごみの廃棄・拡散のパターンに関するヒントが得られている。」(61-62.)
- ・堤 2009 「この環状ブロック群は、石器を作ったり、使ったりした旧石器人が環状キャンプを設けていた証しだと考えられています。(中略) いずれにせよ人びとが円陣を組んで集結する行為により、その絆が再確認され、連帯感を高めたことは疑いありません。サークルをなす集団原理が後期旧石器時代初頭から働いていたことは、社会進化を考えるうえできわめて重要でしょう。」(52-53.)
- ・山岡 (磨) 2012 「…石器ブロック上にテントを組み、居住したとする想像図を見かけることがあるが、足裏の柔らかな子供には鋭い石器は命取りであるし、居住域の中で剥離作業を行い、石片をそのまま放置しておくことは考えにくい。居住の場は別にあったか、集った者たちの中に小さな子供はいなかったのではないだろうか。」(14.)
- ・田村 2012 「後期旧石器時代の遺物集中範囲は、住居や石器製作の跡だとみなされている。この考え方（月見野仮説とよぶ）は 1970 年頃に生まれ、発言力のある諸兄姉と、忠実な弟子たちによってまたたくまに津々浦々に流布された。ところが、これまで 40 年もの間、この仮説が十分に検証されたことは一度もなかった。こうした現状にかんがみ、世界各地域における狩猟・採集民の居住キャンプの状況を参照することにした。(中略) だが、残念なことに、その結果は否定的なものばかりであった。月見野仮説は妥当性をみいだすことはできなかった。したがって、この仮説を基盤とする議論の成立する余地はほとんどないように見える。ミドルレンジ・リサーチに媒介さ（れ）たあたらしい解釈が必要なのではないだろうか。遺物集中範囲の多くは、石器製作の場でも、何らかの活動が化石となった

ものでもない。まして住居の跡でもない。そこはさまざまな行動にともなう二次的な廃棄行動の痕跡にほかならない。人為的、あるいは自然の営力で大きく乱されたゴミ溜め以外のものではない。」(1.)
「月見野以降の理解がまったく見当違いな方向に向かっていたことは明かである。砂川遺跡やこれにつらなる多くの遺跡分析は、誤った前提にたったものであった。これまで、膨大な時間と手間を費やして、個体識別や接合作業が無批判に積みかさねられてきた。遺物集中範囲は、そうしたルーチン作業の意味を何ら問うことなく、機械的に分析されてきた。しかしながら、そうした方法のよってたつ基盤はもろくも崩壊した。基礎的な作業の成果は、まったく別な視点から見直される必要があるだろう。くりかえすが、汎世界的な視野から冷静に遺跡形成過程をみる目をやしないたい。」(32.)

*2005年に開催された日本旧石器学会のシンポジウム以来、「環状ブロック群」を「環状集落」と呼び変える動きが強まったが、2012年に旧石器遺物集中部(ブロック)は「端的にゴミ溜めである」という衝撃的な結論が、世界各地からの民族事例に基づいて導かれた。遺物集中部の成因については、本論が公表された以前と以後に明確に区切られることになった。

- ・**勅使河原 2013**「環状集落と環状ブロック群は、遺構群と遺物群が同心円状に配置されるという点では、遺構・遺物で構成される個々の単位集団が対等な関係を保持しつつ、全体としては集団の関係を強化するという、その意味では同じ共同・平等の理念を表している。しかし、遺構・遺物の型式群の組み合わせでみていくと、環状ブロック群は短期的な居住の場で、たとえばテントのような仮小屋が一時に集中して環状を呈したのに対して、環状集落は長期間の居住の場として、住居などの諸施設が累積することで環状を呈するようになったということで、遺跡景観はもとより、その性格はまったく異なったものであることがわかる。とすれば、環状ブロック群を空間構成が似ているからといって、「環状集落」と呼ぶことは、端的に言って間違いであって、環状ブロック群を縄文時代の環状集落に対比するとすれば、環状のキャンプ、あるいは環状のベースキャンプと呼ぶべきである。」(146.)

*旧石器時代の「環状ブロック群」について、縄文時代の「環状集落」と同列視することに対しては、他の縄文研究者からも異論が唱えられているが(佐々木 2007: 2-3, 22-23. など)、遺物集中部を一次廃棄とする点では「月見野仮説」に依拠している。

- ・**高屋敷 2013**「…環状ブロック群の遺物分布研究では遺物が二次廃棄物である可能性はひとまず置いておき、遺物を全て遺棄物か一次廃棄物であると仮定して、研究が進められてきたようである。田村の指摘の通り、この考えは見直す時期にきている。我々は遺跡形成過程についてさらに検討を行い、遺物が二次廃棄物である可能性を考える必要がある。」(125.)
- ・**小菅 2014**「個体別資料分析法を駆使することによって、遺跡内のブロックとそれらの相互の関係も実証的に研究することができるのであり、遺跡の構造研究は、この方法を基盤として個々のイエを明らかにすることから始まるのである。(中略) 円環部にはイエが円形に並ぶ、定型的なムラの姿が浮かび上がって来たのである。」(59-60.)

*「ゴミ問題」の提起を受けて月見野仮説について「見直す時期にきている」とされたが、相変わらず月見野仮説と砂川仮説が一体化した「イエ・ムラ」学派の見方が述べられている。

- ・ **稲田 2019** 「環状集落は縄文時代前期以降の拠点集落として本格的に発達したが、では旧石器時代の環状ブロック群は縄文時代環状集落と何が異なるのだろうか。もっとも大きな違いは、竪穴住居や貯蔵穴といった不動産が旧石器時代の環状集落に無いことだ。旧石器遺跡の報告書では、石器ブロック・木炭集中・礫群を「遺構」として記述するが多いが、それらは竪穴住居と同列の遺構ではなく、正確には行動痕跡、つまり動産である石器・礫などの分布状況によって示される人間活動の軌跡にすぎない。それは人間の影か足跡のようなもので、土地に造り付けた不動産とは性格が異なる (稲田 2008)。」 (4.)

*旧石器遺物集中部の特徴として「使用痕跡遺構」であることが「行動軌跡」として表現されている。礫集中部研究からは、「ゴミ問題」(田村 2012) について「根底的な問題の指摘」(鈴木 2019) とする言及があった。

- ・ **橋本 2023** 「環状集落への言い換えについては意見が分かれるところである。この件の先駆けである須藤隆司は、長野県立科F遺跡の分析から、「環状集落」を「中央広場を囲んで住居が立ち並んだ景観を示し、住居の配置が公共活動の場である中央広場の存在によって規定された集落形態」と定義した (須藤 1993)。これに対して、稲田孝司は、「縄文時代の環状集落と同類とみる説については、大型・中型の環状ブロック群についてはその可能性があるとしても、直径十数メートル程度の小型のブロック群まで含めると、縄文時代との機械的な類似だけでは説明しきれない。縄文時代環状集落とどこまでが共通し、どの点で異質なのかを明らかにすることが大切だろう」との慎重論を唱えつつも (稲田 2001)、その後「縄文時代環状集落に類似した集落というより、単に旧石器時代環状集落」と呼び、「その固有の意味を解明する方向」に進む (稲田 2006)。稲田に代表される「旧石器時代環状集落説」は、出居博の「たとえ季節性が伴ったとしても、そこが一定期間日常的に居住する集団生活の根拠地である場合は、集落としての概念規定を適用すべき」との主張をはじめとして、多くの研究者から支持されているが、その認定には異論もある (出居 2005)。いずれにしろ現状では「旧石器時代環状集落」は、いわば「みなし集落」である。したがって、真の意味での集落としての概念化には、今後、環状を核とした居住様式の全体像 (遺跡の連鎖構造) を解明し、縄文環状集落との差異を明確にする必要がある。」 (16.)

- ・ **酒井 2025** 「…墨古沢遺跡の環状ブロック群は各ブロックが帯状・円形に明確にまとまっており、ブロック＝住居と表現すると、一般の見学者はその配置から住居が円形に立ち並ぶ環状集落の姿を直結・イメージさせやすく、混乱なく理解しやすい、という3つの理由から、ブロック上への住居配置を行うこととした。」 (99.)

- ・ **水ノ江 和同 2025** 「日本列島に人類が生活をはじめて間もない約 34,000 年前。当時の人々は、大きく輪になって石器づくりなどをおこなっていた。」 (『墨古沢遺跡』裏表紙)

*日本では「石器ブロック＝生活の痕跡＝住居の痕跡」という考え方が主流を占めていること、日本の後期旧石器時代住居跡例において住居内部に石器ブロックが存在すること、一般の見学者が混乱なく理解しやすいという3つの理由から「ブロック上への住居配置」が一般向け書籍でなされている (酒井 2025)。監修者のお墨付きも与えられている。

- ・ **加藤 2026** 「一部の接合資料(1-54・82 など)を除き個体数は多いものの接合点数が5点以内の資料が多

く集中的に剥片剥離作業が行われた状況を示していないことは、ブロック群内の石器の多くは廃棄(岡村 1979) や二次廃棄物(田村 2012) であり、石器集中部は多様な行動の結果集積されたものといえそうです。」(27.)

*2026 年 2 月 7 日に行なわれた東久留米市川岸遺跡のシンポジウムでも、全体として「環状ブロック群=住居跡」とする考え方は改めて問うまでもない前提として扱われており、「環状ブロック群=ゴミ捨場」とする研究者はごく少数であり、このことについて会場から質問があったが深く討議されることはなかった。近年には「環状ブロック群」の形成者は「1 人や 2 人の小集団である可能性」(竹岡 2026:42.) も示唆されるが、「旧石器研究の未来を切り拓く羅針盤!」と腰帯に記された書籍(森先 2026) では「上林遺跡環状ブロック復原図」(同:149.) が掲載されている。

ハーフタイム

吸い殻集中部の形成要因

後半 (砂川仮説批判)

【母岩識別研究略史】

・五十嵐 1992「石器研究においても、「個体別資料分析」の有効性と限界について、明確な研究戦略上の位置付けを与える必要があるように思える。」(17.)

*ほんの思い付きのような気持ちで記した歯切れの悪い一文に対して、「本質的問題点のひとつ」(橋本 1992:20.) とする肯定的な評価と共に「いまことさらに指摘される必要はない」(織笠 1992:123.) という真逆の反応が見られた。

・佐藤 1992「これまで遺跡空間の分析は、いくつかの遺跡で遺物集中部分の把握等が先駆的に行われていた(芹沢他 1959、藤森・戸沢 1962 等) が、遺跡内構造論は、戸沢らの従事した埼玉県砂川遺跡の発掘調査において、ひとつの体系的な研究戦略として提示された。南関東地方の諸遺跡では、通常、互いの視覚的弁別に有利な複数の石器石材が同時に遺跡内に遺存する傾向があり、しかも、剥片剥離過程の部分的過程をそのままその場に残すことが多い。この特徴を利用して、遺跡内出土の大部分の石器を石器原材(母岩)ごとに分け、さらにそれを剥片剥離過程単位(=個体別資料)に区別し、その遺跡内での遺物集中単位ごとの分布を調べ、それと、良好な接合資料の剥片剥離過程の順序と方向を組み合わせることにより、具体的な遺跡内での人間行動の復原と解釈に接近した。その方法は、きわめて革新的であり、かつ合理的であったため、砂川遺跡の研究以降爆発的に増加した旧石器時代の発掘調査例にも支えられて、急速に全国的に流布し、現在においても一般的かつ斉一的な分析方法となっている。」(21.)

*母岩識別研究および砂川モデルに対する当時の一般的な受け止め方である。1992 年当時において「きわめて革新的であり、かつ合理的」と称賛されて「一般的かつ斉一的な分析法となっている」と評された。

- ・池谷 1996 「個体別分類の操作自体についての疑問の一つは、その方法が職人芸的な伝承によって流布しているに止まり、旧石器時代の調査を担当する者が広く共有できる方法として客観的に提示されていないことである。個体別資料は今や旧石器時代研究の基礎的方法論となった観があるにもかかわらず、分類の客観化やこれをめぐる議論が現状ではほとんど行われていないところに疑問を感じざるを得ない。さらに黒曜石に限れば、産地ごとの原石の産状によっては母岩を想定することが困難な場合があるということである。例えば柏峠産の黒曜石の場合、現在採取できる良質の黒曜石原石はわずかに十数 cm～数 cm の風化面をもつ角礫であるが、その個体内でも縞状組織が発達したものの場合は、灰白色～灰色～やや透明感のある黒色まで変化する。こうした個体が遺跡内に数点以上持ち込まれた場合には、剥片の全点を整合的に分類するのはかなり困難となる。

これと関連するが、原産地黒曜石のごく一般的な外見を示す「個体別資料」に帰属する点数が、同一産地内の特徴的な外見を示す「個体別資料」に比べ、結果的に増えてしまう現実があることである。例えば、霧ヶ峰産黒曜石の縞状組織も流理も斑晶も認められないやや赤みのさす透明度のやや高いごく一般的な外見を示すものが多数出土した場合、これをさらに細かく「個体別分類」するのは極めて困難である。この場合はそのすべてを同一の「個体」とするか、表面の艶などを基準に無理を承知でわけるという選択に迫られるのである。さらに透明度が強く夾雑物の少ない信州方面各原産地の黒曜石の場合、微細な剥片については、個体別分類だけでなく、原産地を予測することも難しい状況がある。微細な剥片まで1点残らず、各「個体」に帰属されている例を多く見かけるが、その識別方法を是非とも知りたいと思う。(中略)

遺跡内の黒曜石全点の個体別分類を整合的に行う、つまり誰が試みても同様な結果になるには、例えば個体識別性の高い特徴的な外見の原石が持ち込まれ(て)いる、また持ち込まれた原石の個体数があまり多くないといった限定された条件が必要となると考えられる。そうでなければ、蓋然性の高い範囲に分類をとどめ、分類不能な石器の存在を認める「勇気」が必要となるのではないか。1点残らず「個体別」に収束しなければならないというムードがあるとすれば、やはりここにも「砂川のドグマ」(『収録集』「討論—3」の織笠昭氏の発言)という課題が存在しているのではないか。(115-116.)

*母岩識別研究についてその限界性を「認める勇気」が必要であるとの勇気ある見識が示された(池谷 1996)。「ノーベル賞級」(鈴木 1988)という評価もなされていた。砂川遺跡以外の事例に砂川モデルを適用する意欲的な研究がなされた(国武 1999)。残念ながら母岩識別のデータ操作に多くの問題が指摘されたが(五十嵐 2002)、それに対する応答はない。

池谷 1996 の問題提起を受けて母岩識別研究には、「同一母岩内均質性」と「異母岩間多様性」という二つの条件が考慮される必要があることを指摘したが(五十嵐 2000a)、それに応答するように「識別有効度」を導入する論考が示された(吉川 2003)。

- ・堤 2011 「テーブルの上には、八ヶ岳野辺山高原の二つの遺跡から見つかった無数の黒曜石のかけらが並べられた。その黒曜石は、微妙な色や質感の違いなどから分類され、同じ石と思われるグループに分けられる。「個体別分類」と呼ばれるこの作業は、旧石器研究の上で避けては通れない重要な分析だ。ひとつの石にかかわった人間行動を解明するためのこの分析の原点は、埼玉県砂川遺跡の研究にある。その発掘にあたって戸沢充則らが開発した分析法で、今日の旧石器研究のパラダイムを形成したとい

っても過言ではない。」(109.)

- ・五十嵐 2013 「遺物集中部を無条件に住居や石器製作の痕跡とみなす「月見野仮説」については、世界各地の民族調査例が参照されて否定的な見解(田村 2012)が示されているが、母岩識別による三類型区分に基づく製作・搬出・搬入モデルすなわち「原料の二重構成と時差消費」(安蒜 1992)という「砂川仮説」についても、本質的な問題を胚胎していることが明らかになった。無理のある仮説は、様々な方面からの再検討が必要であろう。」(139.)

*母岩識別研究が「今日の旧石器研究のパラダイムを形成した」という評価も根強いが、「様々な方面からの再検討」は一向に気配がなかった(五十嵐 2005)。最新の概説書では、その評価はもとより言及すらされていない(森先 2026)。

- ・五十嵐 2017 「ある資料に対して、その<場>で製作されたという製作解釈とその<場>に持ち込まれたという搬入解釈は、常に二者択一すなわち一方が採用されれば他方は棄却されるという関係にある(五十嵐 2013a)。旧石器時代の遺物集中部の成因については、「後期旧石器時代の遺物集中範囲は、住居や石器製作の跡だとみなす「月見野仮説」という「根本的な誤解、あるいは短絡妄想は速やかに一新されなければならない」(田村 2012: 1・33)と述べられている。石器資料・礫資料の「移動」は、移動・運搬後の使用を意図した「移動」の他に、こうした使用を意図していない「移動」すなわち不用品の清掃行為に伴う「移動」や片づけ行為に伴う「移動」も含まれる。」(155.)

*コロナ前の2019年には「旧石器研究の理論と方法論の展開」と題した日本旧石器学会のシンポジウムが開催され、「砂川モデルの教訓」として7つの疑問を提出した(五十嵐 2019)。こうした問いかけに対して、当日(日本旧石器学会第17回大会実行委員会 2020: 129-130.)及び後日(野口 2019)になって応答がなされたが、問いかけを發した側からすれば論点が噛み合わず、むしろはぐらかされたような思いが残った。

近年には「母岩資料分析の課題解決に向けて」と題して、複数の母岩を含む「石質」カテゴリーの提唱がなされ(尾田 2022)、砂川類型区分について改変した類型が提案され(山岡(拓) 2012)あるいは海外における母岩識別研究の動向が紹介された(山田 2026)。しかし母岩識別および類型区分が胚胎する根本的な問題が解決したようには思えない。

母岩識別は、その成果に基づく砂川三類型モデルと表裏一体である。母岩識別に基づいて砂川モデルが提唱され、砂川モデルを述べるために母岩識別の有効性が考究されてきた。母岩識別は、様々な工夫や改善が試みられているが、曖昧であり不確実であるというその本質を改善することは困難である。砂川モデルについても、類型区分の妥当性(五十嵐 2013)はもとより、「石核の存在はその母岩の剥離作業終了を意味しない」という根本的な欠陥が指摘されており(五十嵐 2021)、非接合資料を含む母岩識別資料では剥片剥離を主体とする<もの>の動きを追うことはできない。

【総括】

1. 旧石器遺物集中部を構成する資料について、製作(一次廃棄)とするか搬入(二次廃棄)とするかの判断基準が明確でない。製作とする場合の根拠として碎片の存在が挙げられるが、非接合の同一母岩碎片は同定の信頼性に多くの問題を残す(池谷 1996、五十嵐 2002、仲田 2026)。
2. 旧石器遺物集中部は、一次廃棄か二次廃棄か確定していないが住居跡とみなされており、民族事例と

の齟齬が大きい (田村 2012)。

3. 環状を呈する旧石器遺物集中部を住居跡 (一次廃棄) とする明確な根拠は示されていない。環状を呈する縄紋住居跡覆土出土遺物が住居跡の転用遺構に起因することに惑わされているのではないか。
4. 石器接合資料に基づく剥離順序は、一次廃棄の場合も含めて二次廃棄が介在すればなおさら接合資料が出土した集中部の形成順序といった時間制を示すとは限らない (五十嵐 2003b、2017)。
5. 月見野仮説と砂川仮説は表裏一体となって「遺跡構造論」と称されているが、日本考古学独自の解釈がなされており、世界考古学との照合が求められている。捏造事件の教訓を心すべきである。

石器集中部にイエを建てる「月見野仮説」と母岩識別によって製作と搬入というモノの動きを解き明かす「砂川仮説」は相まって「環状遺物集中部の復元図」を世に送り、社会的紐帯確認集落説や大型動物狩猟集落説、外敵警戒集落説、同盟関係確認集落説などの議論がなされてきた。そのこと自体は、田村 2012「ゴミ問題」以前であろうと (森先 2006 など)、以後であろうと (尾田 2026 など) 変わりがない。果たして「説明モデル」は、これらだけののだろうか。環状遺物集中部を語る際に前提とされている「集落」という言葉の意味を今一度問い返し、その復元図に表現されている内容を根本的に考え直す必要がある。注視されているのは、こうした指摘に対して、どのように対応するか、あるいはしないのかという対応の在り方である。

【文献】

- 安蒜 政雄 1990「先土器時代人の生活空間 -先土器時代のムラ-」『日本村落史講座』第2巻 景観1 [原始・古代・中世]、雄山閣：3-22.
- 安蒜 政雄・戸沢 充則 1975「砂川遺跡」『日本の旧石器文化』第2巻 遺跡と遺物 (上) <東日本編>、雄山閣：158-179.
- 五十嵐 彰 1992「関東地方における石器文化の変遷に対する感想」『石器文化研究』第4号、石器文化研究会：16-17.
- 五十嵐 彰 1998「考古資料の接合 -石器研究における母岩・個体問題-」『史学』第67巻 第3・4号、三田史学会：105-128.
- 五十嵐 彰 2000a「接合」『用語解説 現代考古学の方法と理論Ⅱ』同成社：164-175.
- 五十嵐 彰 2000b「文化層」概念の検討 -旧石器資料報告の現状 (Ⅱ)-」『旧石器考古学』第60号、旧石器考古誌談話会：43-56.
- 五十嵐 彰 2002「旧石器資料関係論 -旧石器資料報告の現状 (Ⅲ)-」『研究論集』第19号、東京都埋蔵文化財センター：33-72.
- 五十嵐 彰 2003a「座散乱木8層上面石器群が問いかけるもの」『旧石器文化と石器使用痕研究 -方法論的課題と可能性-』石器使用痕研究会：25-31.
- 五十嵐 彰 2003b「砂川F/A問題」『旧石器人たちの活動をさぐる -日本と韓国の旧石器研究から-』大阪市学芸員等共同研究「韓半島総合学術調査団」旧石器シンポジウム実行委員会：279-284.
- 五十嵐 彰 2005「母岩識別批判(1)~(8)」ブログ『第2考古学』(2005-10-05~2005-10-13)
<https://2nd-archaeology.seesaa.net/article/2005-10-05.html>
- 五十嵐 彰 2006「遺構論、そして考古時間論」『縄文集落を分析する』山梨県考古学協会 2006 年度研究集会資料集：64-83.

第4回 COLS 考古学フォーラム配布資料 (2026-7/26@明治大学グローバルフロント)

- 五十嵐 彰 2013「石器資料の製作と搬入 -砂川三類型区分の再検討-」『史学』第 81 巻 第 4 号、三田史学会：125-140.
- 五十嵐 彰 2017「接合空間論 -〈場〉と〈もの〉の認識-」『理論考古学の実践 I 理論篇』同成社：137-164.
- 五十嵐 彰 2018「考古累重論 -〈場〉と〈もの〉の相互関係-」『日本考古学協会第 84 回総会 研究発表要旨』日本考古学協会：72-73.
- 五十嵐 彰 2019「旧石器研究における接合の方法論的意義 -「砂川モデル」の教訓-」『日本旧石器学会 第 17 回研究発表シンポジウム予稿集』日本旧石器学会：62-65.
- 五十嵐 彰 2021「石核とは何か -砂川モデルを問う-」『東京の遺跡』第 118 号、東京考古談話会：3-5.
- 五十嵐 彰 2025「型式・層位・個物の関係性 -近現代から見通す-」『貝塚』第 80 号、物質文化研究会：11-23.
- 五十嵐 彰 2026「考古資料を読み解くために」『実験痕跡考古学者 -御堂島 正先生古稀記念論集-』御堂島 正先生古稀記念論集刊行会：7-18.
- 池谷 信之 1996「愛鷹・箱根シンポジウムの研究史的意義」『愛鷹・箱根山麓の旧石器時代編年収録集』：113-117.
- 稲田 孝司 2019「旧石器時代研究の歩みと砂川遺跡の調査」『砂川遺跡 -旧石器時代研究の過去・現在・未来-』明治大学黒耀石研究センター シンポジウム／資源環境と人類 2019：1-6.
- 岡村 道雄 1978「長野県飯田市石子原遺跡の再検討 -ブロックの形成を中心として-」『中部高地の考古学』長野県考古学会：9-25.
- 岡村 道雄 1979「旧石器時代遺跡の基礎的な理解について -廃棄と遺棄-」『考古学ジャーナル』第 167 号：10-12.
- 尾田 識好 2022「旧石器研究における石質資料の導入とその意義 -母岩資料分析の課題解決に向けて-」『研究論集』第 36 号、東京都埋蔵文化財センター：1-18.
- 尾田 識好 2026「シンポジウム「川岸遺跡の環状ブロック群」『川岸遺跡講演会及びシンポジウム』東久留米市教育委員会・公益財団法人東京都教育支援機構東京都埋蔵文化財センター：11-14.
- 小畑 弘己 2007「旧石器時代」『考古学の基礎知識』角川選書 409、広瀬 和雄 編著：33-76.
- 織笠 昭 1992「持続する志 -「シンポジウム A T 降灰以前の石器文化」から-」『石器文化研究』第 4 号：120-127.
- 加藤 秀之 2026「川岸遺跡の人々の生活・活動エリア」『川岸遺跡 講演会及びシンポジウム』東久留米市教育委員会・東京都埋蔵文化財センター：27-30.
- 工藤 雄一郎 編 2022『復元イラストで見る！ 人類の進化と旧石器・縄文人の暮らし』雄山閣
- 国武 貞克 1999「石材消費と石器製作、廃棄による遺跡の類別 -行動論的理解に向けた分析法の試み-」『考古学研究』第 46 巻 第 3 号：35-55.
- 小菅 将夫 2006『赤城山麓の三万年前のムラ -下触牛伏遺跡-』シリーズ「遺跡を学ぶ」030、新泉社
- 小菅 将夫 2014「岩宿時代のイエとムラ」『季刊 考古学』第 126 号、特集 日本旧石器時代の成り立ちと文化、雄山閣：57-60.
- 酒井 弘志 2025『墨古沢遺跡』新日本の遺跡⑥、水之江 和同・近江 俊秀 監修、同成社
- 佐々木 藤雄 2007「環状列石初源考（下） -環状集落中央基地の形成と環状列石-」『長野県考古学会誌』第 120 号、長野県考古学会：1-28.
- 佐藤 宏之 1992『日本旧石器文化の構造と進化』柏書房
- 佐藤 宏之 2006「環状集落の社会生態学」『旧石器研究』第 2 号、日本旧石器学会：47-54.
- 佐藤 宏之 2019『旧石器時代 -日本文化のはじまり-』ヒスカルセクション考古 1、敬文舎

第4回 COLS 考古学フォーラム配布資料 (2026-7/26@明治大学グローバルフロント)

- 鈴木 忠司 1988 「ムラと生活」『日本人類文化の起源』考古学ゼミナール、六興出版：95-145.
- 鈴木 忠司 2019 「結語にかえて -礫群からみた法政大学多摩校地 A-0 地点集落-」『礫群から見た岩宿時代集落の研究』古代学協会研究報告 第14輯：101-119.
- 鈴木 忠司・安蒜 政雄・坂下 貴則・飯田 茂雄 2017 「砂川 1968 年、補遺「礫群」」『考古学集刊』第13号、明治大学考古学研究室：47-64.
- 高屋敷 飛鳥 2013 「旧石器時代環状ブロック群の研究動向」『古代文化』第65巻 第1号、古代学協会：122-129.
- 竹岡 俊樹 2011 『旧石器時代人の歴史 -アフリカから日本列島へ-』講談社選書メチエ 495
- 竹岡 俊樹 2026 『新しい日本考古学 -出発のための方法論-』勉誠社
- 田村 隆 2012 「ゴミ問題の発生」『物質文化』第92号、物質文化研究会：1-37.
- 建石 徹 2025 「「新地平」三〇年 -「新地平スタイル」を相対化する-」『異貌』第42号、共同体研究会：52-101.
- 堤 隆 2009 『ビジュアル版 旧石器時代ガイドブック』シリーズ「遺跡を学ぶ」別冊02、新泉社
- 堤 隆 2011 『列島の考古学 旧石器時代』河出書房新社
- 勅使河原 彰 2013 『考古学研究法 -遺跡・遺構・遺物の見方から歴史叙述まで-』新泉社
- 仲田 大人 2026 「母岩資料による石器密度の点検 -人口推定に向けての試論-」『実験痕跡考古学者』御堂島 正 先生古稀記念論集：59-67.
- 西秋 良宏 1994 「旧石器時代における遺棄・廃棄行動と民族誌モデル」『先史考古学論集』第3号：83-97.
- 日本旧石器学会 2005 『環状集落 -その機能と展開をめぐって-』日本旧石器学会 第3回講演・研究発表シンポジウム予稿集
- 日本旧石器学会第17回大会実行委員会 2020 「日本旧石器学会 第17回シンポジウム「旧石器研究の理論と方法論の新展開」：討論の記録」『旧石器研究』第16号：125-142.
- 野口 淳 2007 「石器集中部とは何か -旧石器時代遺跡の分析操作単位を把握・抽出するために-」『明治大学校地内遺跡調査団 年報』第4号：91-98.
- 野口 淳 2009 『武蔵野に残る旧石器人の足跡 砂川遺跡』シリーズ「遺跡を学ぶ」59、新泉社
- 野口 淳 2019 「コメント：砂川遺跡の遺跡形成について」『砂川遺跡 -旧石器時代研究の過去・現在・未来-』明治大学黒曜石研究センターシンポジウム／資源環境と人類 2019：34-37.
- 橋本 勝雄 1992 「五十嵐、道澤、藤野氏へのリコメント」『石器文化研究』第4号：20-21.
- 橋本 勝雄 2023 「環状ユニット（ブロック群）の歴史的意義」『先史考古学論考 -石器と先史文化-』六一書房：3-26.
- 森先 一貫 2006 「第3回日本旧石器学会 講演・研究発表・シンポジウム『環状集落 -その機能と展開をめぐって-』シンポジウム報告」『旧石器研究』第2号：149-154.
- 森先 一貫 2026 『入門 旧石器時代の考古学』同成社
- 山岡 拓也 2012 『後期旧石器時代前半期石器群の研究』六一書房
- 山岡 磨由子 2012 「泉北側第3遺跡環状ブロック群の“場” -石のまとまりはなぜ“輪”を描くのか-」『研究連絡誌』第73号、千葉県教育振興財団 文化財センター：1-15.
- 山田 しょう 2026 「基本への回帰 -世界における砂川モデル-」『旧石器時代の知恵と技術の考古学Ⅱ』安蒜政雄先生傘寿記念論文集刊行委員会：
- 吉川 耕太郎 2003 「個別別資料分析の再検討 -琴丘町小林遺跡における縄文時代中期後半の石器群-」『秋田県埋蔵文化財センター 研究紀要』第17号：32-38.